

メインキャンパス整備事業が始まります



メインキャンパスの開発区域は約70ha。そのほとんどが恩納村の村有地で、残りの一部が民間所有地です。

平成18年11月、恩納村議会は、その村有地を大学院大学用地として現物出資することを可決しました。残りの民間所有地に関しては引き続き買収交渉が進められているところです。

メインキャンパスの実施設設計作業は順調に進められており、環境アセスメントについても今月、環境影響評価書の作成が完了したところです。

大学院大学の整備に関する計画は概して順調に進んでおり、今月上旬には開発申請が許可され、いくつかの建設工事契約が締結されました。周辺環境に最大限の注意を払いつつ、研究等と住宅の造成工事、トンネル・立抗工事がすぐに始まります。

今後のスケジュールとしては、研究棟（ラボ1）と管理棟がこの秋には着工し、これらの施設の竣工は平成21年春の予定です。

シーサイドハウス情報

OISTシーサイドハウスは恩納村内のキャンパスに設置された最初の施設です。旧白雲荘を改修し平成18年3月にオープンしました。

シーサイドハウスは機構が主催する各種コースやワークショップの活動拠点となっており、これまで以下のワークショップ等が開催されています。

- ・国際ワークショップ「一分子解析」平成18年4月17-21日 講師14名 参加者32名
- ・「沖縄計算神経科学コース2006」平成18年6月26-7月6日 講師17名 参加者等48名
- ・「OIST-韓国ワークショップ（神経科学とその新しい展開）」平成19年2月21-23日 講師8名 参加者27名
- ・「酵母のシステムバイオロジーに関するOISTワークショップ」平成19年2月24-27日 参加者21名
- ・「認知神経生物学に関するワークショップ」平成19年3月11-15日 講師22名 参加者25名
- ・「分裂及び停止の細胞制御に関する第2回国際ワークショップ」平成19年3月25-29日 講師31名 参加者41名
- ・「OISTワークショップ（電子顕微鏡の未来）」平成19年3月27-31日 参加者23名



「認知神経生物学に関するワークショップ」がシーサイドハウスで開催されました

3月11日から15日にかけて、シーサイドハウスにおいて「認知神経生物学に関するワークショップ」が開催されました。本ワークショップの目的は、認知機能の神経生物学的起源の解明を目指す研究者が一堂に会し、最新の研究成果や将来の研究の方向性について意見を交換するというものでした。

本ワークショップではチャールズ・ギルバート（ロックフェラー大）、エバハード・フェッツ（ワシントン大）、アンドリュー・シュワルツ（ピッツバーグ大）、バリー・リッチモンド（NIH）らの世界最先端の神経科学者による20の講義や若手研究員による25のポスタープレゼンテーションが行われました。認知に関する局在化とコンピュータ分析とりわけ視覚系、聴覚系、運動系の目覚ましい進歩について発表が行われました。本ワークショップにおける最大の焦点は認知神経生物学の研究を促進する新しいツールと研究材料を見つけることでした。脳の特定の細胞のラベリングと操作を可能にする新たな遺伝子ツールにより、より詳細なシグナル回路の分析が可能になりました。脳の活動を記録し映像化する新しい技術により、「意識」をより深く理解することができるようになりました。

議論は大学院大学の新たなキャンパスの施設設計や、実験動物の福祉や安全の問題にも及びました。また、参加者は機構の研究ユニットの視察も行いました。本ワークショップから生じた全ての発表、議論、そして研究ネットワークは、機構におけるより高次の脳機能に関する研究の企画立案に大変有益なものとなることでしょう。

運営委員会（第3回）が開催されました

機構の運営委員会（第3回）が平成18年12月11日に東京のホテルオークラで開催されました。

運営委員会は、議長を辞任する黒川清博士に代わりトーステン・ウィーゼル博士を新しい議長に、有馬朗人博士を共同議長に選出しました。

また、ティム・ハント博士（平成13年ノーベル生理学・医学賞受賞者）、李遠哲博士（昭和61年ノーベル化学賞受賞者）、金澤一郎博士（日本学術会議会長）を新しい委員として迎えることを決めました。

以上のほか、キャンパスの基本設計と建設の進捗状況、平成19年度予算要求、内閣府独立行政法人評価委員会の評価結果、研究活動の進捗状況などについて議論が行われました。



フレナー理事長、フリードマン博士、利根川博士、尚博士、金澤博士（左より）

新研究ユニット

神経発生ユニット（平成18年10月より）



代表研究者は政井一郎博士。このユニットの目標は、多細胞生物が成長する中で組織パターン形成と細胞運命決定を統制するメカニズムを解明することです。政井博士は東京大学で博士号を取得後、キングスカレッジ（ロンドン）で研究を行い、平成13年には理化学研究所で独立主幹研究ユニットを率い、神経分化、神経回路形成そして神経機能についての基礎的なメカニズムを研究してきました。

理論・実験神経生物学ユニット（平成18年11月より）



代表研究者はクラウス・シュティーフ博士。このユニットの中核目標は、神経の構造と機能の関係を探求することです。シュティーフ博士はマックスプランク脳研究所（フランクフルト）でウォルフ・シンガー教授のもと博士号を取得し、最も最近ではテリー・セジノウス博士（ソーク研究所）の計算神経生物学研究室で非静的状態における神経機能の研究を行っています。

行動の脳機構ユニット（平成19年1月より）



代表研究者はゴードン・アーバスノット博士。このユニットの中核目標は、システム神経科学のレベルにおいて、脳が行動作用を統制するメカニズムを理解することです。アーバスノット博士はアバディーン大学（イギリス）で博士号を取得。主にエジンバラにある英国医学研究審議会“脳の代謝ユニット”において、統合失調症に関する脳のメカニズムの研究に取り組んできました。沖縄においては、神経生物学研究ユニット、発達の神経精神学ユニットと協同して、パーキンソン病に関する脳領域の神経生理学的な研究に取り組む予定です。

発達の神経精神学ユニット（平成19年1月より）



代表研究者はゲイル・トリップ博士。このユニットの目標は、多動性障害（ADHD）を持つ子供の、感受性変動の本質と限界を解明するとともに、感受性変動に関する神経生物学的根拠を明らかにすることです。トリップ博士はオタゴ大学（ニュージーランド）において臨床心理学を学び博士号を取得し、ポスドクとして訓練を受けました。後にはそこでADHD研究診療所を開設し率いました。彼女は行動研究所（ジョージア大学、米国）における初めての客員研究員であり、ノルウェー学術会議先端研究センターのフェローも務めています。

神経生物学研究ユニット（平成19年1月より）



代表研究者はジェフ・ウィッケンス博士。このユニットの全体的な目標は、学習の基礎をなす脳のメカニズムと、それらの神経行動障害への関わり方の理解を進めることです。ウィッケンス博士はオタゴ大学において医学学位と博士号を取得。報酬が引き起こす神経連絡における物理的な変化を実演することによる学習のメカニズムの理解への貢献は広く認められています。彼はオタゴ大学に講座を持ち、イギリスや米国の客員教授を務めています。またノルウェー学術会議先端研究センターのフェローでもあります。